

視覚支援ツールを最大限に活用するための新たな視点

行動分析学による行動バランスの理論化

古林紀哉

（古林療育技術研究所）

KEY WORDS: 構造化、スケジュール表、見通し、行動分析学、ルール支配行動

【スケジュール表の効果と課題】

自閉症児者への支援方法として、視覚支援ツールの一つであるスケジュール表はその有効性が確認されている[1]。自閉症児者は、見通しを立てて行動することが難しい、という特性が指摘されている。そのため、見通しを視覚化し提示することがスケジュール表の基本的な役割である。

しかし、その支援は必ずしも容易ではなく、成功確率が低いという問題が起こっている。この原因として、具体的な指導方法や知識の欠如が指摘されている。

これに対する一つの解決策として、TEACCHによる構造化[1,2]では、支援のポイントとして①視覚化（見せる）、②工夫（見やすく）、③個別化（伝わりやすく）、④意味を持たせる、の順序で改善が述べられている。

本研究では、「意味を持たせる」こと、すなわち、提示する内容とその順序が行動の自発を促すという考え方を強調する。この考え方を行動分析学の視点から裏付け、スケジュール表提示のパターンを定式化する。これにより、工夫や個別化に頼らずとも、支援効果の享受が可能となる。

【行動分析学上のスケジュール表での行動モデル】

人間の行動は、行動分析学の枠組みから見ると、4つに分類することが可能である[3]。それらは、I.無条件反射、II.条件反射、III.随伴性形成行動、IV.ルール支配行動である。ルール支配行動は動物には見られない、人間特有の行動形式である。本稿では、ルール支配行動に着目する。

ルール支配行動とは、随伴性の記述の自己教示を弁別刺激としたオペラント行動である。随伴性の記述とは、ある行動の直後に他の行動が連続するという、具体的な内容である。その自己教示とは、いわゆる「見通しを立てること」に相当する。

随伴性の記述は、一般的には複雑な形を取りうる。本稿では最も単純な随伴性、すなわち行動1とそれに続く行動2の連鎖だけを考慮し、パターン化する。この最も単純な随伴性の記述、すなわち「行動1とそれに続く行動2」は、いわゆる「見通し」に相当する。

この単純な随伴性には、6つのパターンが存在し、人間の行動の自発または自制を促す。

表1：事前の見通しパターンと行動の自発と自制

	行動随伴性（≒見通し）	見通し	行動
Pt.1	好む行動 → 好む行動	良い	自発
Pt.2	好まない行動 → 好む行動	良い	自発
Pt.3	好む行動 → 好まない行動	悪い	自制
Pt.4	好まない行動 → 好まない行動	悪い	自制
Pt.5	好む行動 → 不明な行動	不明	自制
Pt.6	好まない行動 → 不明な行動	不明	自制

従来、自閉症児者が行動を起こすことができない理由は、Pt.5とPt.6に対応する能力の欠如だと説明されてきた。多くの場合、支援者が求める行動は、自閉症児者は本来好まない行動である。そして、支援者は、Pt.3とPt.4での自発を期待した。これらは行動分析学の視点から見ると、自制のパターンに相当する。このミスマッチが、スケジュール表の期待効果が出ない主な理由であると断言できる。

【スケジュール表で支援効果が出る要件】

Pt.1では、スケジュール表を使用せずとも行動が可能なのは自明である。行動分析学の視点から見ると、スケジュール表を用いた行動モデルは、Pt.2に帰着する。

つまり、スケジュール表で効果的な支援を提供するための要件は、支援者が求める行動を設定し、行動連鎖の最後に本人が好む行動を設定し、その連鎖をスケジュール表で視覚化することである。このような視覚化は、自閉症児者に一連の行動を自発的に行うことを促進する。

すなわち、Pt.2は、支援者が求める行動の実施と、自閉症児者の自発を両立し、スケジュール表の効果を最大限に活用することが可能となる。

【スケジュール表支援での行動バランスの提案】

本研究では、自発を促すパターンとして、Pt.2'を提案する。Pt.2'：「3個以上の一連の行動予定の枠に対し、最初から最後の手前までは、支援者が求める行動と本人が好む行動（例：休憩時間の遊び、食事など）を配置し、最後には本人の好む行動を配置する」。こうすると、支援者が意識せずとも基本パターンのPt.2が数箇所自動的に現れる。

Pt.2'では、支援者が求める行動と、自閉症児者が好む行動のバランスが発生する。その結果、自閉症児者は行動の流れを理解しやすくなると共に、自身の好む行動とそのタイミングを予測できるようになる。

【結論】

従来、支援の上級者はスケジュール表での支援効果を出していた。その支援効果は、彼らの経験と直感をもとにした無形知識（いわゆるノウハウ）に依存していた。彼らのノウハウは、Pt.2を軸にしていたことに他ならない。

本稿では、スケジュール表での自発行動のモデルを明らかにした。このことで、より一貫した支援が可能となり、支援初心者でもその支援効果を享受することが可能になる。

【参考文献】

- [1]「自閉症児のためのTEACCHハンドブック」、佐々木正美著、学研プラス刊、2008年4月。
- [2]「自閉症カンファレンスNIPPON2020予稿集」、2020年12月。
- [3]「行動の基礎」、小野浩一著、培風館刊、2005年5月。